

## ブータンの民俗音楽覚書

～王様の音楽家ツェッテン・ドルジ, ダガナ県の遊び歌ツァンモ,  
古い歌ダガ・ラ・ミ・ラジュとシャム・シャ・ドレイ～

Notes on Bhutanese Folk Music : King's musician Tsheten Dorji, playful singing dialogues *tsangmo* and old songs *daga ra mey lazhu* and *sham sha doley* in Dagana

伊野義博, 黒田清子, ペマ・ウォンチュク

Yoshihiro INO, Kiyoko KURODA, Pema Wangchuk

This paper is a report of field survey on Bhutanese folk music in 2017. We have reported the details of *tsangmo*, the playful singing dialogues from the research of Paro, Punakha, Trongsa (Ino 2012, Ino et al. 2014a, 2014b). In Melak village in Trashigang, we found and reported a *khapsho* similar to *tsangmo* (Ino et al. 2015a). From these surveys, *tsangmo* was originally playing when children grazed livestock, but turned out to have disappeared with the spread of school education. On the other hand, We also learned that *tsangmo*'s practice is being done in new forms such as school events and radio programs. So we reported about *tsangmo*'s practice at school and media. At the same time, we held an international symposium on the succession of folk music culture (Ino et al. 2016a, Ino et al. 2017).

Based on these surveys, from September 21 to 27, 2017, we conducted field research in Thimphu and Dagana. The research method is an semi-structured interview. As a result, we were able to add some new facts.

1. We interviewed Tsheten Dorji, who was born in Tibet and became a "king's musician" on his history of music activities. In the past trade was actively done between Tibet and Bhutan. It was an opportunity to know each other's songs. Tibetan songs were brought to Bhutan, and now it became *boedra*, one of the genres of Bhutanese songs. *boedra*, which was brought to Bhutan by Tibetan traders and beggars, is said to have spread all over Bhutan in the Third King's era. In addition, Tsheten Dorji thinks that the song he made since he came to Bhutan should be called *drukdra* instead of *boedra*. This problem is extremely important when considering Bhutanese music.

From his story we learned Tibet had a song *lugar* similar to *tsangmo*. The similarity is that the lyrics are six syllable four-line poetry, melody, improvising to make lyrics, dialogue play.

Also, we have learned that there is a song called *Go Mo* playing riddles. This song is a bet, winning or losing, the winner taking items.

From this survey, we expanded the possibility of research on the relationship between play, divination, gaming and singing.

2. We interviewed about how to play *tsangmo* in the Tseza village in Dagana.

At this time, the villagers sang *tsangmo* for the first time in 40 years. The villagers disputed long hours about how to play and interpret lyrics. We was able to grasp the situation where the *tsangmo* tradition is disappearing. As in other areas, it was divided into two groups, put items, singing while pointing to items with a cane, playing fortune telling about the item (owner) hit at the end of the song. In Tseza village, men and women who became 11 years old played in *tsangmo* and married when they were 14 and 15 years old. Because *tsangmo* is "accurate fortune telling", the villagers are now married, there were families and children, they could not do the same as when they were children. We understood the strength of elements as *tsangmo*'s fortune telling.

In Tseza village, we learned about *daga ra mey lazhu* as Dagana's old song. This song is a sad song of a woman who was taken from the village of Dagana and left in the mountain. This song is currently in a situation where parts are only sung and not all are handed down.

3. We interviewed Sonam Choden who is only one singer of Dagana's old song *sham sha doley*.

This song sang the Zhabs Drung's cane who came to Dagana. This song is singing the process until the cane grows into trees, which is a very long and difficult contents. *Londa*, an opportunity for *sham sha doley* to sing, is an archery tournament in the village, praying for village safety once a year.

Sonam Choden also forgot about *tsangmo* until we interviewed. When she was a child *tsangmo* was a game where several people gambled items. However, she remembers that her grandparents and parents used fortune telling and competition in *tsangmo*. We grasp the situation that *tsangmo* disappeared through generations.

In addition to *boedra* and *tsangmo*, old songs such as *daga ra mey lazhu* and *sham sha doley*, the treasure-like culture that has made the way of life and thinking of Bhutan people has disappeared.

## 1 はじめに

本稿は、筆者等が長年継続研究しているブータンの民俗音楽について、2017年における調査報告と考察をまとめたものである。

ブータンの民俗音楽については、これまで、掛け合いのあそび歌ツァンモ (*tsangmo*) の詳細を西部パロ、プナカ、中部トンサと主要幹線に沿って調査し、報告してきた (伊野2012, 伊野ほか2014a, 2014b)。また、東部タシガンのメラにおいては、ツァンモと同様の性格を持つカプシュー (*khapscho*) という歌遊びを発見し、紹介した (伊野ほか2015a)。これらの調査から、ツァンモは本来子どもが家畜の放牧の際等で遊んでいたが、教育の普及とともに消えつつある民俗文化であることを知った。一方、学校行事やラジオ番組など新たな形でツァンモの伝承が行われていることも分かってきた。そこで学校教育やメディアを中心とした、現在における歌の伝承についても報告し、同時に、民俗音楽文化継承についての学校での取り組みやそれに基づく国際シンポジウムを開催してきた (伊野ほか2016a, 伊野ほか2017)。

これらの研究に基づきつつ2017年の調査が行われた。期間は9月21日から9月27日までの7日間、調査者は、伊野義博、黒田清子、ペマ・ウォンチュク の3人、調査方法は半構造化インタビューである。この結果、いくつかの新しい事実を加えることができ、これらは、次の3点にまとめられる。

- ・ ブータンでいわゆる「王様の音楽家」といわれる人物の音楽歴について  
チベット出身でブータン国王付の音楽家となったツェッテン・ドルジ (Tsheten Dorji) について、その音楽歴についてインタビューを行った。
- ・ 西南部ダガナ県 (Dagana Dzongkhag) におけるツァンモについて  
ツェザ (Tseza) 村やガンカ (Gangkha) 村におけるツァンモの遊び方について、子どもの掛け遊びとしてのツァンモなど、ツァンモの遊びの多様性が見られた。
- ・ 土地に伝わる特有の歌と踊りの実際について  
ダガナのシャム・シャ・ドレイ (*Sham Sha Doley*) やツェザのダガ・ラ・ミ・ラジュ (*Daga Ra Mey Lazhu*) といった歌の存在と継承について

## 2 「王様の音楽家」ツェッテン・ドルジへのインタビュー

ツェッテン・ドルジ (Tsheten Dorji, 84歳男性) は、チベット出身で3代国王付となった音楽家である。現在は首都ティンブーの郊外シムトカ (Semtokha) に在住である。1960年ブータンに渡りチベットの歌ヴェードラ (*boedra* チベットの影響を受けた伝統的な歌) をもたらし、人気を博したという。現在、ヴェードラはジュンドラ (*zhungdra* ブータン主流派であるングロプ *ngalop* の歌) やリクサル (*rigsal* 新しいポピュラーソング) にその人気を奪われ消えつつある。チベットとブータンの音楽交流、3代国王との出会いと彼の音楽活動歴などについて話を伺った。インタビューは2017年9月22日午前中にティンブーのガキルホテル (Hotel Gakyil) 2階のレストランで行われた。聞き手は、伊野、黒田、ペマ・ウォンチュクである。



地図1：ブータンの地図 (これまでの調査地と今回関わる地域を示したもの。黒田2018作成)

### 2.1 ミラレバゆかりの生誕地、チベット・ロダク県ドオルン

ツェッテン・ドルジは、チベットのホダ・センカルグット・チュト (Lhodra Senkar Godruk Chuto) で生まれた。

lhoは南, draは大きい岩, senkargodrukはチベット高僧の息子のためにつくった家, seは敬語, godrukは建物  
の一番上にドアが6くらいある, chutoは10階を意味するという。この寺は、カギユ派の宗祖で有名な詩人  
でもあるミラレパMi-la-ras-paがマルパという高僧から息子のためにつくってほしいと依頼されて建てた寺  
である。またミラレパは人を殺すなどの悪行を行ったので、そのことを償うために10階建ての寺を建てた。  
現在この寺は聖地であり観光名所でもある。

民族音楽学者のソナム・ドルジ (Sonam Dorji) の著書によると、彼はチベットのLhodra Dozong 県Tsay村  
の生まれである (Herman & Dorji 2010:24)。また、ツェッテン・ドルジが言うセンカルグットについて補足  
すると、一般にはセンカル・グトク (セルカル・グトクとも) は、ブータン中部ブムタン北上に位置するチベッ  
ト自治区ロダク県ドオルンにある寺桑略古托寺 (Sekhar Gutok Goenpa) で、ミラレパが1080年に建てた9  
階建ての塔である。ミラレパは自分たちを冷遇した叔父叔母への復讐のため35人を呪殺した。ミラレパ生  
涯の師マルパ・ロツァワ (Marpa Lotsawa 1012-1096) の息子ダルマドデ (Darma Dode 落馬事故で死亡した際、  
秘儀トンジュクで鳩になりインドへ行き高僧ティプパとなった) のために塔を建てさせた。

補足すると「ロダク県のSekhar Gutok Goenpaは伝承によれば11世紀にマルパ・ローツァワことマルパ・チェ  
キ・ロデ (1012-1096) の命によって弟子のミラレパが建てた寺で、その際に、何度も理不尽なやり直しを  
命じるなど、無理難題が課せられたという逸話が有名である。(略) マルパは、この寺があるセ (セカルは  
直訳すれば「セ城」) の集落とモンラ・カルチェン・ラの間にあり、チュキエル (Chukyer, 曲吉) という村  
の豪農の出身である。(略) マルパの出身地については、ドボルン (Dobolung, 卓窩隆, Gro-bo-Lung) のペ  
サル (Pesar, 牌薩) とする資料もある。(高橋2018)。

ツェッテン・ドルジは、ミラレパにゆかりのある地で生まれた。2007年に、チベットに帰郷し多くの寺  
院を見てまわりゾンカ語で歌を創作し、DVDにしたという。旅程は、デリーからネパールに入り、車でチベッ  
トに入りラサまで行った。ミラレパの生まれた聖地 (クンタン地方のキャンガ・ツァ、現在の西藏自治区の  
吉隆県) や故郷ドオルン (セルカル・グトクのあるところ) まで行き、帰りは飛行機で帰ったという。ドオ  
ルンは建物の壁はしっかりしていたが、家は壊れ、森ようになっていた。ブータンへは仲間と一緒に移住  
したので、故郷には今、仲間はいない。かつて住んでいたドオルンの家を見て「昔住んだ4階建ての立派の  
家は、今帰ってみると森のように木ばかりある」といった歌をつくった。その歌を聞いたブータンの大僧正  
は「あなたもミラレパのようだね」とおっしゃった。ミラレパも修行から帰った時に似た歌を作っていたか  
らである。大僧正は、ツェッテン・ドルジをハグし、「友達になりましょう」といってくださった。



写真1: ツェッテン・ドルジ (黒田2018)

地図2: ブムタン地図 (Wikimedia Commons, “Bhutan relief location map”. [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Bhutan\\_relief\\_location\\_map.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Bhutan_relief_location_map.jpg) を元 に黒田2018作成)

## 2.2 ブータンに来て、3代国王と出会う

1959年中国軍侵略に対するチベット蜂起があり、1960年、ツェッテン・ドルジはブータン北部プムタンに來た。そこでセンパ・チョ・チ・チョ・ニ (*Sempa Cho Chi Cho Ni*) という歌を作った。sempaは心、マインド、choは悲しい、chiは一つ、niは二つ。とても寂しい、悲しいといった意味で、「悲しいことが一つ二つと続いてしまい、とっても悲しい」という歌である。当時のチベットの状況を歌ったもので、ダライラマ14世(テンジン・ギャツォ Tenzin Gyatso 1935-) が1959年インドへ亡命してしまい、生き物全てが寂しい思いをしています、というのが歌の大意である。

その歌がブータンで広まり有名になった。チベットからきた25歳の若者が作ったということで、3代国王ジグミ・ドルジ・ウォンチュク (Jigme Dorji Wangchuck 1929-72, 1952年即位) に招かれた。そこで国王の音楽家としてついていくことになった。プムタンには3か月しかいなかった。国王は音楽好きで、いつも「踊ってください」「歌ってください」と言われ、大変だった。

ツェッテン・ドルジが72歳の時のインタビューが描かれたソナム・ドルジの著書によると、「彼の両親が1959年にブータンに逃れ、彼は1960年4月10日に続いた。彼はすぐに3代国王の宮廷舞踊家に選ばれ王の死まで活躍した。彼の母親ソナム・ペモ (Sonam Pemo) も優れた歌手、ダンサーだった。母親は彼がブータンに到着した時、彼がトンサ (Trongsa Tshangkha) のアム・ラチェム (Am Lhachem) と歌ったことを覚えている。ツェッテン・ドルジはチベットから30曲あまりのヴェードラを紹介し、ブータンの重要なレパートリーとなった」。同書にツェッテン・ドルジがもたらした34曲のヴェードラのタイトルが記されている。ブータンに来てから作曲されたものはドゥックドラ *drukdra* として64曲のタイトルが記されている。その中にセンパ・チョ・チ・チョ・ニもある (Herman & Dorji 2010:24, 40, 41)。

中部シムトカゾン (Simtokha Dzong, 1629年シャブドゥンが築いた最初のゾン砦) の近くに平地があり、そこに3代国王と宿泊したとき、「ブータンの歌を作って下さい」と依頼され、2番目の曲チャンラ・ツイ・チャンニツァ (*Chang La Chi Cha Ni Cha*) を作った。その歌を国王に教えた。国王も一緒に歌った。国王は「どうやって踊るのですか」と尋ねるのでツェッテン・ドルジはチベットの踊りを踊った。しかし、国王は「それはちょっと難しい」と言うので、自分でブータンの踊りをつくって踊ったという。

現在、自分が国王の近くにいたことを話すと嘘だと疑う人がいるが、当時国王の世話人サンゲ・テンジン (Sangay Tenzin 国王の秘書) に聞けば本当だとわかる。国王についていて、お世話をしたりして、13年間くらい一緒にいた。4代国王ジグミ・シンゲ・ワンチュク Jigme Singye Wangchuck (1955年生まれなので1961年当時は6歳か) も小さかったので一緒だった。役職は (Chag Gap 付き人) という。

ソナム・ドルジの著書では、3代国王の命で1963年シムトカの下にある Zachok Thangka で作曲した *Changla Chichang* がツェッテン・ドルジがブータンで最初に作曲した曲としている (Herman & Dorji 2010:24)。また、次のような記事もある。「49歳のある朝、国王はティンブーとトンサの間の古いルートに沿った狩猟旅行を準備した。彼は舞踊団を伴っていた。シムトカの下にある王の好きな休憩所 Zachok Tangka に着いた。月の豊かさや季節の美しさに圧倒された王は、ツェッテン・ドルジに曲を書き、歌うよう命じた。彼は即座に *Changla Chichang Nyichang* を歌った。これは彼のブータンで最初の歌である。1963年夏だった (Jigme Wangchuk 2012)。

3代国王についていった時のツェッテン・ドルジの容姿は、チベットの民族衣装を着ていて、長い髪の毛、ピアスもしていた。国王が「これからは私についてきて一緒にいなければなりません。髪の毛を切って、ブータンの民族衣装も準備したのでそれを着て下さい」と言われた。そして国王は、前首相の父にツェッテン・ドルジの髪を切るよう命令した。その後、チベットの衣装のまま国王の前へ行くと、大変高価なゴ (*gho*: 男性の民族衣装) と、国王の靴下と靴を賜った。近くにいた大臣にゴを着るのを手伝って貰った。その日家に帰ると、ツェッテン・ドルジの妻は自分のことがわからなかったという。

ソナム・ドルジの著書にもこのエピソードが記載されている。「ある日、3代国王は Rapy Khandu (Changkap) にツェッテン・ドルジを Dasho Drupen のところへ連れて行き、チベット服を脱ぎ髪を切りブータン人にするよう命じた。次の日、Dasho Drupen は彼の髪を切り、耳輪も外した。タシチョゾンで国王は、自分の靴、靴下、彼の won throm gho をとり、彼がゴを着ると、王はこれから彼はブータン人だと宣言した。夕方、妻 Phari Zam は、夫の大胆に切られた髪と新たな容姿にショックを受けた」とある (Herman & Dorji 2010:25)。



国王のところで、いつ歌をつくり踊るかは、その時による。「今踊って下さい」、「今歌って下さい」「ダムニェン、弾いて下さい」「二胡、笛など演奏してください」など、国王の要求はその時によって違う。

歌を作るときは、例えば「ティンブー・ゾンがきれいなので、歌を作ってください」とか「王宮がきれいなので歌を作ってください」とか、そう言われて歌をつくった。「タシガンのゾンも素晴らしいので、上にいって見て、また下からもみて歌を作ってください」といわれて、歌をつくったこともある。1971年にブータンは国際連盟に加盟した。それについて歌を作るよう国王から依頼された。同年に歌を作り国王に捧げた。それが最後の歌となった。1972年に国王が亡くなったためである。

ソナム・ドルジの著書では、ツェッテン・ドルジがブータンに来てから作ったドゥックドラ (*drukdra*) のタイトル65曲のうち13曲は3代国王のために作曲されたものであることが示されている。主要な10曲の説明もある。その中で3代国王に由来するものに次のような曲がある (Herman & Dorji 2010:41-43)。

*Shar Chok Norbui Lingla (Chak Zam Hogi Chu Di)* : 1960年代、王の依頼でタシガン・ゾン (Tashigang Dzong) の上や下を歩き、その美しさを歌ったもの。

*Kaypai Dechen Chholing (Richi Gaytse Ri)* : 1965年当時3代国王のいたデチェン・チョリン宮殿 Dechencholing Palace について歌ったギャルポイ・トエル (*gyalpoi toelu* 王のための賛美歌)。

*Lhojong Yangki Ngada* : 3代国王の依頼でつくったブムタン旅行を歓迎する歌。残念ながら王は病気になる旅行はキャンセルされた。

*Bumthang Chakla Drodue/ Pangshay Gom* : シムトカ・ゾン (Simtokha Dzong) のすぐ下にあるパンシ・ゴム Pangshay Gom に王室の女性たちが置き忘れた帽子をドルジ氏が取り戻した。1964年作曲の最高傑作。

*Sungla Amo Ro Ro* : 1964年に3代国王に依頼されパロからブムタンに向かう途中の動植物を描写した曲。

*Dzongdi tashi Chodzong* : 1966年ゾンの完成後3代国王に依頼され作ったゾン、王、僧を称賛した曲。

*Rechi Kēpai Rela* : 1965年3代国王の依頼により作ったギャルポイ・トエル。ジャゴム (Jogom) の山々と緑豊かな風景を歌ったもの。

また前掲の記事に、「彼の最後の歌は1971年9月21日にブータンが国連に加盟したことを記念した書かれた *Druk Zamling Chitshok* だった」とある (Jigme Wangchuk 2012)。

3代国王の時に歌を作ったのはそれくらいである。それからも歌作りを続けた。4代国王が60歳になったときも国王への感謝と賛美の歌を作り110人が自分の作った歌で踊った (2015年11月11日、生誕60年記念式典が催された)。「ブータンはヒマラヤの山々にフェンスのように囲まれていて、その中には糸杉などの木々が育ち、その中に素晴らしい国王がいて国民はとても幸せに暮らしている」といった歌詞を作った。

4代国王について、昔ツェッテンドルジグンタという高僧がいた。その人が書いたものの中に、今4代国王が住んでいる場所について大昔書いた占いがあり、ティンブー北部の地区ジュンシナ (ジョンシナ Jungshina と) というところの北側の奥にブータンの4代国王の王宮ができるという話 (占い) である。ツェッテン・ドルジは一つの歌を作った時、その話も入れて、その通りに4代国王の王宮ができた、という内容の歌を作り5代国王ジグミ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク (Jigme Khesar Namgyel Wangchuck 1980年-) に捧げた。国王から感謝された。

5代国王のためにも2つ歌を作った。同じようにチベットからブータンにきた人が全部で110人くらいいて、ツェッテン・ドルジをトップとするチベットのグループがある。毎年行われるブータンの大きな祝賀行事、国王の戴冠式など催しがある時に歌をつくる。戴冠式 (2008年11月6日タシチョ・ゾン Tashichho Dzong で行われた) の時だけでも6つくらい歌をつくった。その時男50人女50人あと10人が入ってきて踊った。

これまで作った71の歌の記録について質問をすると、チベットの歌もあわせて135あり、一つずつ説明できるといふ。これからブータンの歌について会議がある、そのための準備を今している。ソナム・ドルジも私の歌の記録をもっているが全部ではない。今、その歌の一つずつの記録を書き出して準備している。

他にも王様付きの音楽家はいたのかという質問に対し、踊ったり歌ったりするのは、今なら RAPA (王立舞踊団) のような人はいたが、歌を作っていたのは、ツェッテン・ドルジだけとのことであった。

### 2.3 チベットとブータンの交易における音楽交流

ブータンとチベットについて、ブータンの文化はチベットからきたという人がいるが、本当は違う。自分

の親の前の昔からブータンにも歌があった。何で一緒になったかという、他の地はわからないけど、自分の場合、ブータンとチベットの交易の場で歌の交流があったからである。

メラカルチュン峠 (Melakhar Chung モン・ラ・カチュン・ラ、チベット・ブータン国境の峠) から流れた川はチベットからブムタンの方にチャムカル・チュ (Chamkar Chu チョコル・チュ Chhoekhor Chu) となって流れている。そこで3日間の歌の競争があった。そこで互いの歌を知った (地図2)。

ツァンパ・ツォンドウ (Tsangpa Tshongdu) という場所がある。チベットから峠をこえてブータン側 (現在ブータンの軍隊が駐屯している)、メラカルチュンからここまでは一日の距離である。ツァンパ・ツォンドウで歌の競争が行われた。私も小さい頃そこに行ったことがある。そこに交易をするためブータンから2人 (トンサとブムタンから来ていた)、チベットから5人が来ていた。そこで出会った時にブータン側が最初に食事をふるまう。その日は取引しない。食事の後に売り物の値段の話をする。相互に値段が高すぎないように話し合っ、サインをして (契約が成立すると)、それから酒を飲んで踊る。それをチャンシェ (*chang zhey* 酒を飲んで歌う歌) という。二日間寝ないで歌って踊る。ブータン側から歌をだせば次はチベット側が出すというように歌い続ける。そこで2~3日踊り続けて、もう十分になった時に踊りをやめ、交易の話に移る。そういった機会に相互の歌を知るようになった。これは人から聴いた話ではなくて自分も参加した時の話であり、こういった話は (重要なことなので) ブータン政府 (など国) からもっと質問して欲しい。夏は、チベット側のロムテ (Longthey) という場所で行う。夏と冬で交易の場所は違う。(おそらく、夏は、チベット側が食事を用意する。)

この交易の詳細はヴェードラに関するツェッテン・ドルジへのインタビュー記事にもみられる。「ヴェードラは、チベットのロドラ・ゾン (Lhodra Dzong) に由来し、その後、ルンツェのクルテ (Kurtse in Lhuentse)、ブムタン (Bumthang) などに広がった。『それはすべて、毎年12月中に開催されたチベット・ブータン間の交易から始まった。チベット人は肉、塩、羊毛を持っていき、ブータン人は米、ザウ (*zaw* 焙煎米)、トウモロコシ、マタ (*mathra* 赤や栗色を主とした格子縞模様) やセタ (*sethra* 黄色やオレンジ色を主とした格子縞模様) の織物を持ち込んで交換した。交易の間、音楽は一般的なコミュニケーション手段の1つだった。様々な歌と踊りの競争が開催されていた』と、ツェッテン・ドルジは話す。『取引が行われていた場所は Lawg gi Tshongdu として知られていた。チベット人は (*boezhey* チベットの歌) を、ブータン人は (*drukzhey* ブータン人の歌) を歌った』。ブータン音楽研究センターのソナム・ドルジは、歌詞、その踊りの動きに合わせた曲から、ヴェードラの起源についての研究を行ったとき、彼らはチベット人により歌われた民俗歌 *boezhey* から始まったと結論づけた。(略)『交易を始める前に *tendrel* として、各グループが歌い、踊った。それは数日間続いた。交易の大半は、東部では夏期には Singye Dzong、冬には Khomachhu の2つのルートを経由して行われた。交易は数ヶ月続いた。その間、数多くの歌と踊りが交換された』 (Thinley Zangmo 2016)。

## 2.4 チベットの歌について

ツェッテン・ドルジによると、チベットの歌は次の3種類になる。

ゴルシェ (*gor zhey*) : 歌と踊り、円になって歌い踊る。

チャンシェ (*chang zhey*) : 酒を飲みながら歌う。踊ったりはしない。

タンシェ (*trang zhey*) : 物乞いをする人の歌。二胡 (ピーワン)、ダムニェン (ダーニャンとも、6弦の撥弦楽器。ブータンのダムニャンにある半分の長さの7弦目はない) を弾きながら、物乞いをする。

チャンシェは酔っ払って歌うためメロディが長い。タンシェのタンは貧しい、家もないので、二胡やダムニェンをもって物乞いをして歌う。

また、チベットではルーガル (*lugar*) というツァンモに似たものがあるという。

Lugar mi chap (la) zerna	ルーガルやりたくないけど
Choe gi chapdo (la) zigey	あなたがやりましようと言う
Tshik la nok thruel jung na	言葉の間違いがあつたら
(tshik: ことば, nok thruel: まちがひ, jung na: あつたら)	

Zakpo ey pa trey wong      右頬を叩きますよ（ビンタします）  
 (zakpo: ぽっぺ, ey pa: 右, trey wong: 叩く)

メロディは最もポピュラーなものだという。チベットのルーガルの場合は、メロディは一つしかない。ブータンのツェンモはもっと多くのメロディ、3種類くらいある。次の楽譜は、この時に歌ったツェッテン・ドルジの旋律だが、ブータンでもポピュラーなもので、パロ（伊野2012）、プナカ（伊野他2014a）、トンサ（伊野他2014b）、メラ（伊野他2015a）などでも採取されている。



### 楽譜1：ルーガルの旋律（歌：ツェッテン・ドルジ）

ルーガルは、いつ歌うのかということは特に決まっていな。子どもも遊びで歌うし、ヤクを放牧している時や小麦粉をつぶす時に男と女が掛け合ったりした。

人が歩きながら歌っているとよくないように見えるという人がいるが、歌は宝石のようなものだと考えている。皆が集まったときは歌で楽しめる。私は教育を受けておらず学歴もないが、歌のおかげで国王と何回も会うことができた。歌のおかげで大僧正も友達になりましたと言ってくださった。すべて歌のおかげである。10万の金があっても有名になることはできないが、自分の歌を皆が歌えば有名にもなれる。

（ルーガルの歌詞を教えて欲しいという質問に対して）普通の歌と違って決まった歌詞があるわけではない。相手が歌っている間に即座に考えて作らなければならないものである。ブータンのツェンモも同じで、決まっているものはない。その時の即興。仏の話をしているように、相手がきついことを言えば自分もきついことを言う、どんどん怒ればそのようになる。何にでも応える。口、目、手は、心の召使いである。チベットの他の地域でも、ルーガルのような歌はある。ブータンと同様で地域によって少しずつ違いがあるかもしれないが大体は同じ遊びの歌である。

昔は、外国人もブータンへ入らないし、外国文化も入ってこなかった。ブータンの中だけで歌をつくり踊りを踊っていた。チベットも同じである。今は、外国文化も入り、外国にも行ったりして情報が入り、現代的なものがいいというようになっている。昔は、あまり外国の話聞いた記憶がない。アメリカが日本に爆弾を落としたのは子どもの頃に聞いたが、その程度で全然情報がなかった。

## 2.5 ロゼイ（lozey）とゴモ（go mo）

チベットにはブータンのロゼイ（lozey: 口頭で相手と詩を交し合う）のような歌はなくルーガルだけである。しかし、ゴモ（go mo）というのがありロゼイとは異なるが似ている。goはドア、moは占いを指す。全部質問で聞くものである。例えば、ある家について、その家は北向きか南向きか、馬はいるか、その馬は白か赤か、子どもは何人いるか、などを質問していく。最後にその家がどこかを教える（当てる）。あらかじめ品物を賭けているので当たったらそれを貰う。負けたらそれをあげる。なぞなぞのようなものである。

たまにととても頭のよい人がいる。自分のことを聞いていて、最後は自分の家だったということもある。そうやって相手に当てさせる。「あなたの家にそれがあるでしょ」などと言う。このようにゴモは、家や、動物、土地などについて少しずつなぞなぞをかけていくものである。モmoは、（占い）の意味である。ゴはドアであり、それが西か南か、なぞをかけるのが占いをしているみたいなのでゴモと言う。

## 2.6 歌や踊りの習得、歌づくり

もともとチベットにいたときは、学校には行っていなかった。ヤクを飼っていた時に、友達と歌を歌っていた程度である。ブータンに来てから歌をつくり出した。ブータンに来てから今まで71の歌をつくった。

メロディをつくるのは大変だが、人のつくったものを盗むのは良くない。どこで作るかという、一人山の上について風の音を聴く、その中からメロディが出てくる。全部は出てこないが、少しでてくる。そこからつくっていく。それから調理のように味付けをしていく。または川の側で、耳を澄ませてもつくる。川の音をよく聴いてつくる。自分は高僧ではないが、風や川の音からメロディをつくることはできる。日本人

にも山へ行って、川へいってメロディをつくってみてほしい。何の話をしてもしも嘘をつかないことが一番大事である。心から思った本当のことを歌にするといいものができる。一番大切なのはマインド（心）である。

歌詞は、もともとブータンとチベットは同じ宗教であるし、ブータンの国語がゾンカになったのは最近のことである。それまでチベットとブータンはツェキ（chokei 仏教語。チョケ *chöke*, *choekey* とも）だった。チベットの言葉とブータンの言葉は似ていたので、歌詞をつくるのは難しくなかった。本当のチベット語だったらちょっと違うが、書き言葉はツェキだったのでそれほど大変ではなかった。例えば3代国王になってからゾンカの綴り、例えばジャツォ（*jatsho* 海）はゾンカにする時はジャンツォ（*jamtsho*）となる。少し違うだけである。（1971年に、3代国王ジグメ・ドルジ・ワンチュクはゾンカ語を国語として提唱し、国王が重視していたブータンの文化や伝統の保護の一環として、ゾンカ語普及政策がとられた。）

## 2.7 ブータンの歌、ヴェードラ *boedra* という用語の使用について

最近、歌のコンテストの時にゲストとして参加している。去年も一人が（ドルジ氏のつくった）寺の歌を歌った。コンテストのオーナーが、「その歌はいつつくったのかわかりますか」と私に聞いてきた。私は「これはヴェードラ（*boedra* チベットの影響を受けた歌と踊り）ではない。これはブータンでつくった歌なので、ヴェードラというのは間違いである。ドゥクルー（*druk lue* ブータンの歌）、ドゥクシャブタ（*druk zhabtra* ブータンの踊り）というべきだ」と話した。どうしてブータンで作った歌なのに、ヴェードラという用語を使用しているのか。それだと、海外の人もチベットの歌だと思ってしまうことになる。

ブータンで歌をつくればブータンのメロディに合わせる。チベットでつくればチベットのメロディにする。それが違えばまた問題になる。野生の動物はいつも自分を殺す人が来ないか耳をすませている。そのように耳を澄ませて人の話を聴くべきである（そのようにして歌を作るべきだ）。

ヴェードラという用語の使用についてもめている。ソナム・ドルジなどとも話合っている。これから会議もある。ブータンは小国だが伝統文化を守っているから世界中で有名になっている。大切なのは、自分の歌の（呼称の）問題。ヴェードラという語を用いることでブータンの歌でなくなる可能性がある。自分はチベットから来だし、あまり強く言うことはできないが、コンテストの歌のジャンルの分類でヴェードラと言っているの、そのような言い方は変えて欲しい（ソナム・ドルジはドルックドラ *druk dra* を用いている）。

ソナム・ドルジの著書ではヴェードラについて次のように書かれている。「ヴェードラは『チベットのメロディ』と訳される。音楽家たちへのインタビューによると、ヴェードラはチベット人により作られたがブータン人によって言葉や音楽が変容した。特にブータン人はテンポをゆっくり長くする傾向がある。ヴェードラはチベットから交易をしに来た人、チベットから戻った巡礼者などによりブータンにもたらされた。初代国王の時代（1907-1926）、チベットからの物乞いは、プナカ、ブムタン、ティンブー、パロの各地でキャンプをして、フィドルや曲を演奏した。おそらくヴェードラにも通じていた。1950年代以降、チベット難民はヴェードラの普及に重要な役割を果たした。Gangkar Wangdiによると、交易ルートに沿ったブムタンの人々はヴェードラの踊りが優れている。国境に近いクルテでは、ヴェードラのメロディもダンスもチベットと似たスタイルで演奏されている。ヴェードラは、音楽の愛好家だった3代国王の治世中に人気を博した。彼はそのジャンルの名前を *boedra* とした。この時代の前には、チベットからの歌は *boe zhabthra* と呼ばれていたであろう。（略）ツェッテン・ドルジは、ヴェードラがチベットの Boe Chamgon 村で起きたことに関連すると考える。この村では年に一度、女性たちが歩いて飲み水 *tsay chu* をくみにいく。この機会に女性たちは地域の神を崇拝し村の健康を祈るために新しい歌を作る」（Herman & Dorji 2010:8-9）。

ソナム・ドルジの伝統文化を大事にする研究活動は素晴らしい。私のような昔の者を大事にしてくれている。お互いに助かっている。昔、書かれたものを一人の高僧が持っている。そういう話を聞いて歌をつくったことがある。真実かどうかは自分の目では見ていないのでわからないが、そういう話がある。84歳だが、まだ勉強が足りない。学ばなければならないことがたくさんあると考えている。

## 2.9 小括

かつてはチベット・ブータン間での交易が盛んに行われており、その際に互いに歌い踊る音楽交流の機会があった。ツェッテン・ドルジが経験した具体的な交易の様子が聞けた。そういった交易により、チベット



からもたらされた歌が、ブータンの歌のジャンルの一つであるヴェードラとなっていく重要な機会でもあったと考えられる。

ツェッテン・ドルジはブータンに来てすぐに3代国王の音楽家となり、王の依頼で多くの歌を作った。それだけでなく、ツェッテン・ドルジの曲をすぐに一緒に歌い、踊ろうとするほど3代国王の音楽愛好家ぶりがよくわかるエピソードである。もともと交易者や物乞いがチベットからもたらしたヴェードラを音楽好きな3代国王がブータンに広めたことも興味深い。ただ3代国王がヴェードラと名付けたのかその真偽は定かではない。また、チベットのゴルシェ（輪踊り歌）、タンシェ（物乞いする歌）とブータンのヴェードラとの関係は今回詳しくはわからなかった。さらにツェッテン・ドルジは、ブータンに来てから作った歌をヴェードラとすることに疑問を感じていた。ソナム・ドルジのようにドゥクドラとすべきと考えていた。

チベットの歌の種類、ツェンモに似たルーガルというジャンルのあることがわかった。その歌詞は、ツァンモ同様に6音節4行詩であった。しかし、即座に互いの掛け合いで遊ぶ歌であるようだが、具体的な遊び方や歌詞などについては今回わからなかった。ただ、ブータンのこれまでのツァンモの調査でその歌詞に「ラサの肉の値段が高すぎる」と出てくるのもかつては交易とともに歌の競争があったことや、チベット・ブータン間の人の行き来が頻繁にあったことが想像できる。なお、この時歌われた旋律は、ブータンのツァンモでもしばしば採取されたポピュラーな旋律と同一のものであった。

また、なぞなぞ占いともいえるゴモという歌があることがわかった。タシガンのメラ村での調査でツァシググ(*tsa shi gu gu*)と呼ばれる質問に対して答えるなぞなぞがあった。ツァシググは、夜並んで寝る時に子どもが遊ぶものである。「人間に必要なものは何ですか?—水です」「便利に座るもの何ですか?—イスです」など簡単な内容のものだという。答えられれば1ポイント入り、わからなければ相手に1ポイント入る勝ち負けのある勝負である。このように村、寺、家、家畜の名前を賭けて行うゲームである。チベットのゴモは、このツァシググとの共通点も見いだせる可能性があり興味深い。

### 3 ダガナにおけるツァンモについて

ブータン西部の中でも南に位置するダガナ県(Dagana Zongkhag)は、インド西ベンガル州と国境を接し、標準標高も低い(1000m)密林地帯で、かつてはあまり人が住んでいなかった。ドゥク派がブータンの領域を拡張し、1651年にダガ・ゾンが建設されてからは南部の拠点となった。シャブドゥンの時代から東部トンサ、西部パロ、南部ダガナの3地域はそれぞれペンロブ(総督)が置かれる重要地域となった。近年は他の南部地域同様にネパールや東部からの移民が増加している。ダガナ県は14郡に分けられておりツェザ郡(Tseza Geog)は北に位置し、県庁ダガナを含んでいる。ダガナには町はなく、ダガナ中心に一本道の小さな店が並ぶだけである。この商店街ではネパール系住民が目立つが、車で数分移動したツェザ村などではネパール系住民は見られなかった。ツェザ郡の人口は1772人、戸数は170戸とのことである。



写真2：ツェザ村（黒田2018）

地図 3: ダガナ県地図 (Wikimedia Commons, “Dagana Bhutan location map”, [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Dagana\\_Bhutan\\_location\\_map.png](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Dagana_Bhutan_location_map.png) を元に黒田 2018 作成)

### 3.1 ツェザ村でのツァンモ調査

ツァンモ (*tsangmo*) は、二組に分かれて歌を掛け合って遊んだり、互いの相性を占ったりする歌である。かつては放牧や野菜の皮むき作業の間に子どもによって歌われていた生活の中にあった民俗文化である。現在、子どもは学校へ通うようになり、生活形態も急速に変化し、ツァンモは歌われなくなっている。その状況はツェザ村でも同様であり、かつてツァンモで遊んだことを覚えている人に集まっていた。調査は2017年9月24日、村長 (Tseza Geog Administration) であるプルバ (Phurba 36歳男性) の事務所にて行われた。聞き手は、伊野、黒田、ペマ・ウォンチュクである。年配者の何人かは、ティンブー校外のクエンセル・ボダン Kuensel Phodrang にて2017年9月23日に行われた大仏の落慶法要に出かけていて居なかった。

最初に女性3人、男性1人が集まった。リンジン・ドルジ Linzin Dorge (男、年齢不詳)、ゲム・ナム (Gyem Lham 女、青服、51)、ウゲン (Ugyen 女、52)、ゲム・ナム (Gyem Lham 女、赤服、55)、の4人である。その後女性二人、サムテン・ワンモ (Samten Wangmo 女、45、ピンク服)、ケンチョー・ザム (Kencho Zam 女、茶服、50) が加わり、計6人となった。



写真3：村長事務所（黒田2018）



写真4：ツェンモの様子

### 3.2 最初の4人の話

小さい頃は、ツァンモやロゼイを歌った。40年ほど前になる。今はツァンモで遊ぶ人はいない。アロ (*alo*)、ロゼイ (*lozey*)、チャム (*cham*) などもあった。ツァンモは、田んぼに肥料を持って行った時や家でのロチェ (*rochoe* 法事) の時に歌って遊んだ。今50代の人たちは、学校に行けなかった。政府の人が来て (人口調査)、子どもの名前を控えていった。親は、米びつに子どもを入れて隠した。子どもは、牛の面倒をみなくてはならない働き手なのである。11歳～12歳の頃から牛の世話をしたりする。今はティンブーにいても車のナンバーすらわからない (文字が読めない)、今の子どもたちには、教育を受けさせたいと考えている。

遊び方は、ツァンモにより相性占いをおこなうモタブニ *tsangmo motapni* (品物を媒介とした予言、占い) である。ツェザ村ではツァンモ・タブニ *tsangmo tapni* と呼ぶ。男女のグループにして、相性占いをした。歌で戦うツァンモ・ツェニ *tsangmo cheyni* (グループによる掛け合い) はしなかった。枝で指してモタブニをした。たまに男女でチェニをやったこともあるが、ほとんどは占いだった。

ウゲンは、歌と踊りが好きだった。親からは教えて貰わなかったが、一度見て気に入ったものは、何度も思い出して練習し、できるようになった。昔ながらの覚え方である。7、8歳はまだ子どもなのでやらない。11、12歳から牛の世話を始める。歌遊びも始める。

今は家の屋根はトタンになっているが、昔は木の屋根だった。それを担いで運んだ。その時、休むために腰掛けるトマ (*toma*) という杖があるが、相手をびっくりさせてトマを落とすと罰として歌を歌わなければならない、といったようにして遊んだ。歌を歌うことが出来なければ、指で相手の手にパッチンの罰をした。家でも村の人が手伝いにくることがあり、その時に家の母親が酒を用意していなければ、罰として歌わせたりした。このように何かの罰として歌わせるという遊びであった。

ツァンモは、ロチェでもやったが、家族とはやらなかった。結婚前の若い男女の間でしたものだ。男女の

相性があうかどうかを占った。男女二人だけではやったことはない。また、女同士、男同士ではやらない。今のように手紙も電話もなかったころの遊びである。

リンジン・ドルジによると、品物を置いておいて、誰のものかわからないようにして歌う。そうするとたまに男の品物と女の品物が当たったりする。持ち物を前に出して、占い（歌詞の内容が）が当たると、デンベデンベデンベ（*dhanbey* 当たった）と言いつつ。品物の持ち主は、そこに居ない好きな人の名前も品物につけて占ったりもした。

### 3.3 ツァンモの実際

すでにツァンモを経験してから、40年ほど経過しており、各自様々な記憶が錯綜して、遊び方についていろんな意見がでてしまい、なかなか決定的なところまでわからなかった。実際に遊んでみていただいた。

一回目 ナムケ・チェニ「*tsangmo namkey cheni* 品物を媒介としたペアの決定による予言、占い」

品物の所有が誰かはきめていない。回りながら歌っていき、品物を持ち主にもどす。歌った人が歌詞の説明をしはじめた。6人の説明が行われた。しかし、歌詞と説明が違って混乱がみられた。

二回目 ツァンモ・タブニ「*tsangmo tapni* 品物を媒介とした予言、占い」

占う人を二人きめた。二人だけが各品物の所有者を知っている。二人で、ペアの相性が本当かどうかを占う。しかし再びいろいろな話が錯綜して、やり方についてもめる。

収集された歌詞は、次の通りである。歌い手については、同名者がいるため、それぞれ着用している服の色で示した。歌詞の下括弧は、これまでの調査で同様の歌詞がみられた場合の調査地と歌詞番号を示している。Chan yee (伊野ほか2014a), Tshangka, Tangsibji (伊野ほか2014b) Samtengang (伊野ほか2016), 糸永 (糸永1986)。

桃	Samten	Wangmo45		茶	Kencho Zam50
青	Gyem	Lham51		赤	Gyem Lham55
男	Linzin	Dorge?		黒	Ugyen52

座席表

一回目の歌詞

#### ①男

Gang gi etho (la) metho 山にしゃくなげの花  
 Tencha gang (la) mesha ずっと山で咲くことはできません  
 Tencha gang lu sharu もしずっと山で咲くことができたなら  
 Gang gi gencha tubey 山の飾りになれるでしょう

解釈例: 私と一緒にになったら山の飾りになれるでしょう。(反対の意味では)山の飾りは好きではありません。誰もずっとはきれいな(咲いて)ではられません

(糸永5-72に同じ歌詞, Tangsibji4-21, Samtengang6-61に似た歌詞あり)

#### ②青

Jana ting ley thuen mi インドの南の方からもってきた  
 Norbu dung kar yel khi 宝石のようなほら貝  
 Chi (la) karchang dang song 外から見ると真っ白  
 Nang la sungkey hen bey 中からもすごくきれいな音がします (la = も)

解釈例: 外見も中身も素晴らしいのはあなただけです

(糸永5-2に同じ歌詞, Chang yee1-5に似た歌詞あり)

## ③茶

Tsuna sergi (la) zuki           もしするなら金の指輪  
 Matsuen nuengi zuki           なかったら銀の指輪  
 Tenda ragi zuki               鉄の指輪は  
 Da la goepa mindu (lo)       私はいません

解釈例：私に合うのは金の指輪です。（反対の意味では）良くなければ金でもいない、素晴らしいなら鉄でもいいです。（糸永5-4, Samtengang6-57に同じ歌詞）

## ④桃

Choe ni jamtsho (la) phaka   あなたは海の向こう側  
 Nga ni jamtsho (la) tsu ka   私は海のこちら側  
 Ley da milam yoe na           もしご縁があったら  
 Jamtsho bulu zom sho       真ん中で会いましょう

解釈例：お互いに好きであればすごく遠くにいても集いましょう  
 （これまでに何度もきいた歌詞, Samtengang6-1）

## ⑤赤

Denchu khaga (la) druzhi   四角の座布団  
 Doena nga ya mi (sho)       座ると自分ひとりでも足りない  
 Ga na choe ya lo sho       もし好きならばあなたも来てください  
 Choe da (la) nga bey doe gey   あなたと私一緒に座りましょう

（これまでに何度もきいた歌詞, Chang yee2-2, tsangmo cheymi2, Samtengang6-5）

## ⑥黒

Gangkha kawa cha ba       山の雪が積もっているのは  
 Minam kuengi shey bey       みんなが知っている  
 Chisem chilu nowa       （私が）あなたを好きになっていることは（chilu nowa 一人のことが好き）  
 Nga lu mipa mashey       私しか知りません

（糸永5-69に同じ歌詞）

この後、歌った本人が歌詞の説明をしていった。遊び方について議論が錯綜したが、次のような話が出た。

- ・ 現在は年をとり家族も子どももいるので、昔のように本当に好きな人を思っでできない。
- ・ 品物を置くときに好きな人（その場にいらなくても可）のことを思っで置く。それに当たったら思いが叶う。
- ・ 品物に当たるだけでなく、ツァンモの内容も良くなければつきあえない。
- ・ 歌詞はニエン・ルー（nyen lue 耳に心地よい）だけである。（戦うツェニにならない理由と思われる）
- ・ ある人がある人を好きだという噂をチェックする。
- ・ ツァンモを知っている人が占いたい人の代わりに歌うことができる。
- ・ 男が歌って男の品物に当たったらデンベじゃない。女の品物に当たったらデンベとなる。
- ・ 品物が人数分なくても占える。

## 二回目の歌詞

## ⑦青

Shoku jasho karchu           白い手作り紙  
 Jey ngo sergi (la) dr isa     ドリサ（金）で書く  
 Ga di dri sa min du         嬉しい気持ちで書きちゃだめ  
 Cho di la dri sa du         悲しい気持ちで書かなければなりません



(3行目と4行目の歌詞が逆と思われる。後出のソナム・チョデンのツァンモに似た歌詞あり)

歌い手である青が男のことを好きかどうか、好きな人の品物に当たるかどうか。男女交互に輪に座り、真ん中に品物を置く昔のやり方を思い出しながらツァンモを試みた。

### ⑧黒

Lhasa bagu hang ley	ラサの町の中
Shachi noe go (la) samba	肉を買いだいたい思いました
Shalu tsilu mi du	油がついてるおいしい肉はないのに
Gong di hampa tho song	値段が高すぎます

(Chang yee2-9, Tangsibji4-8, Samtengang6-79に似た歌詞あり)

黒は男が好き(という設定)で歌い、男の品物に当たったけど(歌詞から)男は別の人が好き、ということになる。

### ⑨黒(男の代わりに歌った)

Phari pang gi (la) lo ley	遠くの平らなところで
O lo zuki (la) jang song	(何重にもなっている)指輪なくした
Deypa chen gi ma tuop	信心深い人が見つからない
Kewa cheng lu thop so	縁がある人は見つかりました

⑧で男は別の人が好きというのは当たり(実際奥さんがいるので)。⑨は黒が男の代わりに歌った。黒の品物に当たった。歌詞は男の思っていること、黒とは前世から縁が合わないという意味で、黒も旦那がいるので当たりとなる。

### ⑩黒

Goechey serbi (la) toego	キラ上に着るシルクのトエゴ(セルビは黄色のトエゴの生地)
Tsupa semlu yoe ba	トエゴにしたいと思った
Ga bi tshong ko naly	店員の店に(糸がたくさんいる=トエゴつくるには)
Ki bi nye nga min du sey	糸の種類がありません、足りません(ki biは糸, nye ngaは種類)

解釈例: 私はあなたとつきあいたいと思ったけどいい所が少なかった。

あなたはその人を好きだけど、その人はあなたを好きじゃない。ポチェ(プナカではポチャ *pocha*: 男の品物)に当たった。残るモチエ(プナカではモチヤ *mocha*: 女の品物)は黒の品物である。品物が一つ残ったらない(しかし、後ほど1人残った人は修行へ行く歌を歌っていた)。

ここで⑧⑨⑩はモタブニ、最初の①から⑥はナムケチュニだと説明がなされた。ここからしきりなおし

### ⑪男

Lhasa throm ley noe we	ラサの町で買った
Zhamo tshering kil khor	ツェリンキルコルの帽子(ツェリンキルコルは帽子の名前)
Gulu zhasu ma tsu	頭に三日しかかぶってない
Lo sum tsu bi wodra sey	三年ぐらいかぶった感じがします

解釈例: 帽子を掛ける壁の釘、帽子はいろいろな人が被る、帽子がどこに行っても釘はそこで待っている  
男の品物に当たったので、自分ことを好きになる人はいないということになる。

### ⑫青

Khamchi kha (la) zhim bay	桃の実を食べてもおいしい
Meto mi la zeyba	花は目でみてもきれいです
Khashing shing gi tsawa	桃の木の下で

Gom chi (la) jurgo nosong lo 瞑想したいなと思います (gom = 瞑想)

(糸永論文5-58, Samtengan6-2に同じ歌詞あり)

男の品物に当たったので、男が青のつきあう人だということになる。

### ⑬青

Choe ni sergi (la) bumpa あなたは金のブンパ

Nga ni nuengi (la) bumpa 私は銀のブンパ

Ley da milam yoe na ご縁があったら

Chosham (la) thrama zom sho lo 仏間で会いましょう

(Samtengang6-7に同じ歌詞あり)

再び男の品物に当たる。

### ⑭青

Karyul (la) karsa (la) chilu 白いお椀

Remo ja ni thong ri 百から千までの模様

Karyul (la) charu chagey お椀が割れても構いません

Remo (la) yosa min du lo 模様がまがってほしくありません (模様が消えてほしくありません) yosaは

ひっくりかえる (Chang yee1-3, Tshangka3-2, Tangsibji4-2, Samtengang6-29に似た歌詞あり)

全部当たりではないという説明がなされる。

### ⑮黒

Phari pang gi (la) lo ley 遠い平らなところに

Shawa yang dro (la) ma dra 鹿が上にいたり下にいたり

Yadro tsa ma za 上にいっても草も食べない

Ma dra chu yang ma thung 下にいっても水も飲まない

(Tangsibji4-6, Tangsibji4-11, Samtengang6-52, 6-59, 6-69に同じ歌詞あり)

歌の占いは当たる。その場にその人がいなくても占える。昔ならよりよく当たったが、縁がない今やっても (難しい)。

### ⑯青 (お坊さんの)

Choe lu chachi mindu あなたのペアがない

Nga lu ya chi (la) mindu 私もペアがない

Cha mi ya mi ni ku ペアないのは

Dambi choe lu drogey 修行しに行きましょう

最後に残った、好きな人がいない人はお坊さんになる。

(Chan yee1-7に同じ歌詞あり)

## 3.4 小括

今回のツァンモはすべて同じ旋律であった。この旋律はこれまでの調査でもよく聴かれたスタンダードな旋律ともいえるものである。楽譜2にトンサで採取された旋律を示すが、ここで歌われたものも、人により音程、長さなどに差異はあるが、同様のものではあった。

♩ = ca.80 開始音の実音C4

歌: Aum Seday, Rinzin Dem, Tsewang Lhamo

Nam la - ting - chi - - la mi - - na Ja - chen - nyob - sang - - - dra (do) Pha la bu - chi - mi - na - - Ri gi la kang - chu dra (do)

楽譜2: トンサで採取された旋律 (伊野他2014b)

初出の歌詞は⑨⑩⑪であった。今回、糸永論文と同じ歌詞が多くみられた。ツァンモが久しぶりであることからトンサ・タンシジやサムテガンと比べると掛け合いはあまり長く続かなかった。モタブニや品物の所有者を二人が決める点、歌いながら品物を枝で指していく点は他の地域と共通していた。しかし、40年ぶりということで、どう遊んだのか、歌詞の解釈についても揉めていた。まさに長年歌われず記憶がうすらぐ＝伝承が途絶えつつある状況を把握できた。

全体的にはツェザ村のツァンモは占いの要素が強い。男女の相性チェック、男女の関係について占うものとのことであった。他の地域と異なっていたのは、歌で戦うツェニがないことである。また、モタブニもツァンモの場にはいない人のことも占うことができる点である。自分の好きな人のことを思って品物をだす。

ツァンモをするのは11歳から（牛の放牧ができる、一人前）とのことであった。相性を占い、14-15歳で結婚する。当たれば「デンベデンベ」と言うのは他の地域と同様であった。⑩の「結婚できないから、相手の人が見つからないからお坊さんになりなさい」の歌詞は、プナカでもみられたものである。

遊び方や歌詞の共通性からプナカ、ティンブー、ダガナの深い関係性が考えられる。シャブドゥンの死後の戦争におけるゾンの存在がツァンモの広まりに関係する可能性を指摘できる。

また、ダガナで有名な歌にダガ・ラ・ミ・ラジュ (*Daga ra mey lazhu*) があるという。昔ティンブーの知事がダガナにきた。ティンブーに妻がいたが、ダガナのベンザ・プムと言う女性を妻にするため連れていった。しかし途中でベンザ・プムを山の中に置いてティンブーの妻の所へ行ってしまった。ダガラミラジュは、ベンザ・プムがさみしくて作った歌だという。山や川など歩いて行った途中の景色が歌われているという。ドゥンシンの木に隠れて待っている、犬が家の守り神、犬がいないから熊が守り神などとても悲しい歌だという。ただ、一冊の本になるほど歌詞が長く、今は順番通りに歌えないとのことであった。ダガナ・ツェチュ (*tshechu*: 祭り) の時に踊るが、ダガ・ラ・ミ・ラジュは内容的に寂しい悲しい歌なのでジュンドラではない。ジュンドラはゾン砦や僧侶について歌うものだからである。

#### 4 ダガナの古い歌シャム・シャ・ドレイ (*Sham sha doley*) についてソナム・チョデン (Sonam Choden) へのインタビュー

シャム・シャ・ドレイ (*Sham sha doley*) は、ダガナ県に伝わる古い歌である。ブータンの若者は現代のポピュラーソングにばかり興味を示すため、他の伝統的な民俗文化と同様に、この歌も消滅の危機にある。現在この歌は、ケビサ郡でのみ歌われる。ケビサ郡ゴンカ村 (*Khebisa Gewog Gangkha*) のソナム・チョデン (Sonam Choden) 戸籍上は Sheley Mo, 49歳女性) は、このシャム・シャ・ドレイの唯一の伝承者である。インタビューは2017年9月25日午前、ダガナ県のサンゲイ ホテル (*Sangey Hotel*) の食堂にて行われた。聞き手は伊野、黒田、ペマ・ウォンチュク (通訳) である。ソナム・チョデンと元ケビサ郡長であった夫のウゲン・ドルジ (*Ugeyn Dorji*) 夫妻は雨が降る中、朝暗いうちにゴンカ村を出て4、5時間かけて我々が泊まるホテルまで歩いて来ていただいた。

##### 4.1 シャム・シャ・ドレイの由来・内容について

ウゲン・ドルジによると、この歌はシャブドゥン (*Zhabs Drung* ブータン政教両面での最高指導者の称号。初代はブータンを建国したガワン・ナムゲル (*Ngawang Namgyal* 1594年-1651年)、その後転生を繰り返す) の杖の話だと言う。シャブドゥンが仏塔の前に泊まった時、石に座り皆を祝福した。ジュンシン (*jongshing*) という不思議な木がある。半分枯れても半分生きている。翌年には反対の半分が枯れても生きている。その木は、元はシャブドゥンの杖だった。

ソナム・チョデンは、シャム・シャ・ドレイのドレイ (*doley*) は、シャブドゥンが座った石のことだという。シャム・シャ (*sham sha*) は本来シャムタ (*sham ta*) で、僧侶が身に着ける赤い布のことだという。

BBS (The Bhutan Broadcasting Service) にシャム・シャ・ドレイの記事がある。「19世紀シャブドゥンの5番目の生まれ変わり Zhabdrung Jigme Chogyal (1862-1904) がダガナ・ゾン訪問後に作られたという。シャブドゥン自身が作詞をした。現在ケビサ郡でのみ歌われている。Tashiding Gewog の Sham-Doley 村近隣の村の女性たちは、数百年前に Zhabdrung Jigmi Chogyal の前で歌を演奏したと言われている。Dagapzams により最初に歌われた。Doley 村の名前は石から派生したと言われているが住民ですらその存在を知らないという」(Pema



写真5: ダガナ中心地



写真6: 左ウゲン・ドルジ氏と右ソナム・チョデン氏

Namgay 2012)。

歌の内容は、シャブダウンがゴンカにやって来て、その場に座って杖をついた。その杖は木になった。その木について後年、お経にして説明したものだという。例えば、木にはどんな場所が必要か、水がなければ涸れるので水のある場所、その回りの風景、木が大きくなって葉が茂って実がなる。そういった一連の話をお経にした。その経典は近くのお寺にあったが火事で焼けてしまった。それを寺の管理人のケニエゼコ (Koenney zeko) という人が、覚えて皆に教え、そこからメロディをつけて歌にしたという。

以前、この話の真偽について揉めたことがある。この歌は、トンサヤパロのものだと言う人もいた。ソナム・ドルジ (Sonam Dorji 民族音楽研究者) や RAPA (The Royal Academy of Performing Arts) は、歌の内容やその場にある木などについて研究して、確かにこの地の歌であることがはっきりした。

#### 4.2 歌唱機会・習得・継承について

歌う機会は、高僧や国王が村に訪れた時や、ロチェ (*rochoe* 法要) やダガナ・ツェチュ (*tshechu* 月10日の意味。各地で催される祭礼) など重要な行事の時に、ジュンドラ (*zhungdra*) と同じように踊る。普段はあまり歌ってはいけない。ロチェの時もそんなには歌わないとウゲン・ドルジはいう。

シャム・シャ・ドレイは歌と踊りが一緒になっている。以前2週間くらい RAPA で教えた際、ジュンドラに詳しいペン・ハモ (Pema Lhamo ブムタン県 Bumtang のタン谷 Tang, メンバルツォ Mebartso の奥の村出身、有名な RAPA の歌手) に「これは難しい、いくら練習しても難しい歌だ」といわれた。BBS の記事でも、歌詞が複雑で若者が習うことが難しいことが指摘されていた。歌うグループはあるが、きれいに歌える跡継ぎは現在一人しかいない。

とても長い歌である。本来は、木の実をとって乾燥させるまで歌詞があるが、今は実がなるところまでを歌う。そこまでもとても疲れる。一人で歌うと30分くらいかかる。グループ (一人が歌詞を独唱し、「シャム・シャ・ドレイ」の箇所をグループが斉唱する形: 音頭一同形式) で歌う時は1時間くらいかかる。

ソナム・チョデンは、子どもの頃から歌や踊りに興味をもっていた。夜祖母たちが踊っているのを見て、それを頭の中で繰り返し、次の日には、全部できるようになっていた。14歳から村の女性は大人の仲間入りをし、他の人と一緒に踊るようになるという。ツェザ村のウゲン氏と同じ習得方法である。

シャム・シャ・ドレイは、ソナム・チョデンの母方の親戚アム・レンゴ (*Am Lyengo* ゴンカ生まれ、故人) に習ったという。BBS やソナム・ドルジから「村の人皆に教えた方がいい。もし、ソナム・チョデンが亡くなったらどうするのですか」と言われた。アム・レンゴから、昼食や夕食の時に習った。食事やお茶をもっていつて御馳走して歌を習った。以前は9人くらい一緒に習った。*Yesley Lamo* という人が歌詞を習い、ソナム・チョデンがメロディを習った。その後、偉い人の前で歌った際など報酬が出ると、必ずアム・レンゴに半分渡していた。

現在ソナム・チョデンが一番歌を教えている人物である。ダガナのツェチュの指導をしており、祭のある時に今までにならったジュンドラを含めシャム・シャ・ドレイを教えている。



#### 4.3 お供えの歌チェップ・ピニ (*Choep philni*)

歌や踊りもいきなり歌うのではなく、最初に、チェップ・ピニ (*Choep philni*) というお供えの歌を歌ってから、次のステップとして歌や踊りをはじめるのが本来の形だという。家でロチェをやる時も同じで、お供えの歌を歌ってからでしか他の歌や踊りを教えることはできない。他の地域でもお供えの歌はあると思う。

以前、ゾンのお祭りは、全14郡のうち5か所が交代で担当していた。ケビサ郡が担当の時、ソナム・チョデンは歌をお供えしてから祭りの準備を始めた。それまでは、雨が降って会場が濡れたりしたが、その年は、5日間とも晴れた。県知事や高僧から「お供えの歌をやるとちがうね」と言われた。

・歌：お供えの曲チェップ・ピニ (*Choep philni*)

・歌：Sham sha doley 一部 song choepa la bi lo kenchosum

ケンチョソム (kenchosum ラマ僧) が、ダルマ (経典) にお供えする。最初木を植えるためには水、実があるためには〜) 歌詞は仏教語チェキのためわからないという。映像記録として、木の下で皆座ってグループで実演したビデオ (ソナム・ドルジ録画、ただし全部ではない) があるという。

#### 4.4 村の生活と伝承

##### 4.4.1 シャム・シャ・ドレイの歌唱機会である村のアーチェリー大会ロンダについて

シャム・シャ・ドレイの歌唱機会は正月、法要、そしてロンダ (*londa*) という村のアーチェリー大会である。ロンダは、村の中だけで3日間行われる。

ロンダのために男3人と女3人のチョッピ (*chopi*) という役が決められ、その人たちは、3日間分の肉を出さなければならない、米は他の人たちが提供する。ロンダの朝、チョッピは朝早く起きて最初にトゥップ (*thubu*) という骨やチーズを入れたお粥を出す。3日間の進行役のキャプテンが「トゥップを飲みに来て下さい」と触れ回る。スープを飲んだ後、朝日が昇ってきたら村中皆が寺に集まらなければならない。集まらなければ罰金がある。

寺には、ソナム・チョデン達があり、お供えの歌チェップ・ピニの後、ジュンドラなどもやって、3日間のロンダに問題がないように、矢が人にあたらないように、来年まで村に災いがないようにと歌で祈る。

歌が終わると、寺からでて、村人たちは並んで、男たちは旗を持ち、女性は歌いながら、アーチェリーの会場まで行く。村長のスピーチ (村に問題がないように、喧嘩しないように、目上の人を尊敬するように、などの話) があり、その後キャプテンが3日間のルール (靴下が短いのはだめ、ビーチサンダルはだめ、悪口はだめ、キャプテンはノートに記録し、違反すると罰金があることなど) を話す。そうやって3日間のアーチェリーを楽しむ。アーチェリーの矢が的に当たった時は、女性たちがそこへ行って歌い踊る。

アーチェリーが終わったら、チョッピの一人の家に集まって、料理、酒をたくさんふるまう。乾杯の前にチュトヤチュという歌がある。その歌を歌ってから皆で呑んで、真夜中まで歌い踊る。

(次の日) シャプトゥンの杖に由来する木の下でお昼を食べる。上座には村長、そこから順に皆並んで座る。そこでは話したらだめというルールがある。もしお喋りした場合、キャプテンが持っているいら草でたたくという。いらくさには棘がありとても痛いので話さない。

(チョッピが) 干肉をもってきて上座の村長や政府の役員から配膳をする。それからチョッピの女性3人はバンチュン (竹製のお弁当箱) を持ってくる。そこに、参加者たちは、チョッピが持ってきた肉の量、自分もらった肉の量に応じて金を入れる。

このようにチョッピの女性3人、男3人の役割は、台所の重要な役 (食事係、給食係) である。ロンダの最終日に来年のチョッピと、キャプテンを決める。そこで、皆また寄付をする。

ロンダは、大きな大会ではなく村の中だけで行われる行事であり、アーチェリー大会だが、守り神、神様にお供えをし、村の一年の安全を祈る大切な行事である。

##### 4.4.2 ロンダの後の年中行事について

この行事の次は、ダガナ・ツェチュがある。12月に5日間ある。5日間+1日合計6日間。2018年は1月8~12日でダガナ・ゾンで開催された。最後の日の練習の最後にチャムジュ (*chamjuu*: チャムのリーダー) の披露がある。宮本(2011)はこのチャムジュについて次のように述べる。

「チャムの踊り手全員のなかで最も能力のある者はチャンペンおよびチャムジュとして選抜される。前者が一番手として列の先鋒を務め、後者は二番手として殿を務める。彼らは熟練した踊り手として演者全体を率いるとともに、演者の指導に当たることを義務付けられている。道化役のアツァラは一般に俗人によって演じられるが、チャムとチャムの間で即興劇などを演じて余興を担うと同時に、プログラム全体の進行役であり、また時にベチャムの演者としても活躍する。アツァラ役の演者はしたがってツェチュ全体の構成や個々の演目についての深い知識が必要とされ、リーダー格のアツァラはしばしば前のチャンペンやチャムジュであることが多い。彼らは時にベチャムの指導者としても活躍し、チャム全体において不可欠な役割を果たすのである。」(pp.64-65)

次にダガペラのツェチュ (dagapela Tshechu ダガナ南東の村のツェチュ) がダガナ・ラカン (dagapela rhakhang) であり、そこへも行く。2017年は12月29～31日に行われた。このツェチュは、ダガナ・ツェチュを見られない Dorona, Gesarling, Gozhi, Tshendagang, Tashiding, 5 地域のため2008年に開始されたものである。

3月にダガナ・ゾンの中でトゥ・チェという行事がある。ソナム・チョデンは行かないため、それについて詳しくわからない。

このようにソナム・チョデンは、ロチェ、ロンダ、ツェチュのほか、メラム・チェンモ (moen lem chenpo 高僧) が来て読経する行事 (他県でも行われる田植え前に行われる法要) に出席する。

#### 4.5 歌の伝承機会

(伝承は) 仕事の時に、若い人たちに歌を教えている。田んぼの行事、草刈り、稲刈り、田植え、米の脱穀などの仕事をしながら歌う。ここではヤクの放牧はしない。夏はあまり機会がない。草取りやとうもろこし、昔だったらゲレイ (そば)、ウィット (麦粉)、秋の草取り、稲刈りと続く。最近では、みかんやカルダモンなど新しい作物の仕事もある。特に田んぼの仕事の中で皆が集まる時に歌を教えている。作業の時にジュンドラ、ヴェードラを教える。田植えの歌、稲刈りの歌などはない。作業歌 (仕事歌) としては、パキ (paki: 土搗き歌) は今でもある。

練習として行うのはツェチュの前一ヶ月間くらいの特別練習である。また、国王がお見えになる時にも練習をする。歌は、普通の人がつくったものより高僧がつくったものが多く、内容も深い意味があるので昔からのを教える。大僧正の最近の歌も教える。最近の若者に流行りのリクサルは誰でも作れる歌であり、親の前で歌っても恥ずかしい歌、これは教えない。

#### 4.6 ツァンモ

小さい頃は、ツァンモをやって遊んでいた。年を取ってからはツァンモを忘れていた。品物を前においてツァンモをやっていた。品物をおいて、歌いながら棒 (枝) でさしていく。歌が止まったところのものを自分のところにもっていく、それが勝ちとなる。それしか遊びがなかった。歌で占うナムケチェニ (tsangmo namkey cheni 品物を媒介としたペアの決定による予言、占い)、モタブニは無かった。つまり、品物を賭けた遊びである。

賭けるものは特別なものでなくて何でもよい。昔は小さいタバコ入れ。その辺でとってきた棒も置いた。木ははずれ。家のものは持ってこず、そこにあるものを遊びで賭けていた。ツァンモは小さい子どもの頃の遊びで、大きくなったら他に興味が移った。ジュンドラなど。ツァンモは祖母に教えてもらった。

ツァンモ (歌1)

Gawa phari song tse	うれしいしあわせ (gawa) 奥にいっちゃう
Cho mo tsu rey loksang	悲しみが自分のところ
Gawa lok na lok sho	嬉しいがもどってほしい (lok はもどる)
Cho mo (la) lok sa mindu	悲しみはもどってきてほしくない

## ツァンモ（歌2）

Thridu phari song chang	太陽がどんどん遠くにいっちゃう
Drima tsel rey loksong	影は自分のところ
Thridu lokna loksho	太陽は戻ってきてほしいけど
Drima lok sa mindu	影はもどってきてほしくない

ツァンモ（歌3）（実際にものを指しながら歌う。）

（歌詞は、3.3⑤座布団のツァンモ）

一人が歌ったら次の友達が交代して歌う。少なくとも3人、普通は5人くらいで遊んだ。どの品物で歌が止まるかが大事であり、歌詞の内容（座布団の歌詞などについて占うなどということはなく）は関係ない。歌詞をつくって遊んだことはない。

小さい頃、祖母母たちがお正月などの時に歌で戦うツェニ（二組による戦い）をやっていた。年寄りには、ツェニ、たまにナムケ・チェニの時もあった。

ウゲン・ドルジは、子どもの頃ツァンモはみていただけでできないという。彼の父たちは、ものを縁があるというような、歌う人が棒をさして、歌う人と品物の所有者が縁があるというような遊びをやっていた。ロチェの時お酒の席で、家の中や外でよっぱらってツェニもやっていた。自分たちの小さい頃はそうやって遊んだりしたが、今の子ども達はそういう遊びを全然知らない。

つまり、ソナム・チョデンとウゲン・ドルジの親世代には、ツァンモ・モタブニ（*tsangmo motapni* 個々の人の品物合わせによる予言、占い）、ツァンモ・ナムケ・チュニ（*tsangmo namkey cheni* 品物を媒介としたペアの決定による予言、占い）、ツァンモ・ツェニ（*tsangmo cheyni* 二組のグループによる掛け合い）などを大人たちはやっていた。当時子ども世代であったソナム・チョデンは、歌詞をつくったりせず（歌詞内容は関係なく）歌の終わりで棒が止まった時の品物をとる、品物を賭けるだけのツァンモをしていた。その後、ツァンモをやらなくなった。そして、現在の子どものはツァンモで遊ぶことを知らない。こうしてツァンモは消えていき、ソナム・チョデン世代の記憶の中に残るのみという状況であることがわかった。最後に次の二つのツァンモを歌ってくれた。

<最後のツァンモ>

## ①

Choe ni jhamtshoo la faka	あなたは海の向こう側
Nga ni jhamtshoo la tsuka	私は海のこちら側
Lay dang mi lam yoe na	もし運命があるのなら
Jhamtshoo bu lu zom sho	海の真ん中で会いましょう

## ②

Shoku jasho kachu	白い手作り紙
Yegu sergi wo dra	金で字を書くときに
Ga dri dri sa yoe chang	喜んで書かなければなりません
Cho di la dri sa mindu	さみしい（気持ちで）書きちゃだめ

ブータンの人は今、伝統衣装の着方など伝統文化を大事にしていない。ブータン人より外国の人がゴをきれいに着ている。外国の人がそうしていることに感動した。自分の文化の大切さをわからなければならない。習いたい人には教えたいが興味の無い人には教えたくない。とブータンの伝統的民俗文化が消えつつある状況を憂いていた。

## 5 おわりに

ツェッテン・ドルジへのインタビューから、かつてのチベット・ブータン間の音楽交流、3代国王が音楽を愛好した様子、チベットの音楽ジャンル、ツェンモに似たルーガル、なぜなぜ占いゴモなどについて話を

伺えた。かつてチベット・ブータン間で交易が盛んに行われており、その際に互いの歌を交互に歌い何日も踊る音楽交流の機会があった。ツェッテン・ドルジも実際に経験した。そういった機会により、互いの歌を知り、チベットの歌がブータンにもたらされ現在ジャンルの一つであるヴェードラとなっていた。もともとチベットの交易者や物乞いがもたらしたヴェードラは、3代国王の時代ブータン各地に広まったと言われる。ヴェードラの各地への普及とブータン国王、国家形成、ゾンカの国語化などとの関係性が伺えた。

しかし、チベットのゴルシェ（輪踊り歌）、チャンシェ（酒を飲みながら歌う歌）、タンシェ（物乞いする歌）とヴェードラとの関係は今回詳しくはわからなかった。ツェッテン・ドルジはブータンにきた1960年以降、3代国王の依頼でブータンの歌をつくった。3代国王は、その時々歌をつくるよう、楽器を演奏するよう、具体的に指示をした。ツェッテン・ドルジの曲をすぐに一緒に歌い、踊るなど3代国王の音楽愛好家ぶりがよくわかった。また、さらにツェッテン・ドルジは、チベットからきたメロディはヴェードラと言えるが、ブータンに来てから作った歌をヴェードラとジャンル分けされていることに疑問を感じていた。ソナム・ドルジのようにドゥクドラとすべきと考えている。ブータン音楽とは何かといった時に、この問題はきわめて重要である。

チベットにツェンモに似たルーガルというジャンルのあることがわかった。その共通点は、歌詞が6音節4行詩であること、即座に歌詞をつくり互いの掛け合いで遊ぶ歌である点である。具体的な遊び方や歌詞、の相関性などについては今回わからなかった。ツェンモのように枝を用いたり、占ったりする行為は指摘されなかった。チベット各地域で少しずつ異なるとのことであった。今回ルーガルとして歌われた旋律は、ブータン各地で歌われているポピュラーなものと同じであった。また、ブータンのこれまでのツェンモの調査でその歌詞に「ラサの肉の値段が高すぎる」と出てくるのは、かつての交易とともに歌の競争があったことや、チベット・ブータン間の人の行き来が頻繁にあったことと関係していることが推測された。同じくツェンモの歌詞に「インドの南から来た」と出てくるが、インドとの関係は課題として残る。

また、なぞなぞ占いともいえるゴモという歌があることがわかった。このゴモは、勝ち負けがある点でタシガンのメラ村でできたツァシググと似ている。品物を賭ける点も他地域との遊び歌と共通点も見いだせる可能性があり興味深い。このようにあそび・占い・賭け事と歌の関係についても研究の可能性が広がった。

ダガナ県ツェザ村でのツェンモ調査では、40年ぶりの思い出しながらのツェンモの試みにも関わらず歌詞がいくつか歌われた。しかし、遊び方や歌詞の解釈について長時間揉めてしまったように、まさにツェンモの伝承が途絶えている状況が把握できた。他の地域と同じく二組に分かれその間に品物を置き、歌いながら杖で品物を指していき歌の終わりに当たった品物（の持ち主）について占う遊びをしていた。他地域と同じもしくは似た歌詞がいくつかみられ、メロディはこれまで調査したもののうちスタンダードなものと同じであった。またこれは、ツェッテン・ドルジがルーガルとして歌ったものでもある。占いが当たった場合は「デンベ」と言う点も他の地域と同じである。ツェザ村では当時14, 15歳で結婚をしたが、11歳の一人前になった男女がツェンモで相性占いをしたという。ツェンモ・タブニ（他地域ではツェンモ・モタブニ：品物を媒介とした予言、占い）やナムケ・チェニ（品物を媒介としたペアの決定による予言、占い）といった男女の相性占いが主な遊び方で、ツェンモ・ツェニ（二組による歌の競争）は行われなかったとのことであった。この点は、ツェンモでペアになっても実際結婚をすることはほとんどないブナカやトンサや、ほとんどの地域が一番盛り上がるのがツェニであること、学校でのツェンモではもっぱらツェニが行われるのとは異なっていた。ツェザ村のツェンモの歌詞にニェン・ルー（耳に心地よい歌詞）しか用いられないこととの関連が伺える。また、ツェンモは「よく当たる占い」ので、結婚前の男女がやるものであり、年をとり家族や子どもがある現在、好きな人を思ったツェンモ占いは（嘘では）できないとのことであった。ツェンモの占いの要素の強さがわかった。

またツェザ村では、ダガナの古い歌としてダガ・ラ・ミ・ラジュの話聞いた。山に残されたベンザ・プムが歌った悲しい歌である。本来なら一冊の本になるほど歌詞が長いものだが、現在順番通りには歌えず、ダガナ・ツェチュでも一部しか歌われていないなどすべてが伝承されてはいない状況を把握できた。

ソナム・チョデンへのインタビューからダガナの古い歌シャム・シャ・ドレイの由来や内容、その歌唱機会である村のアーチェリー大会ロンダ、子どもの頃のツェンモの思い出について話を伺えた。シャム・シャ・ドレイはこの地を訪れたシャブドゥンの杖が木になる過程が歌われたもので、歌詞はとても長く難しいもの



で、さらにあまり歌ってはいけないということで現在伝承者はソナム・チョデン一人となってしまった歌である。シャム・シャ・ドレイが歌われるロンダは村のアーチェリー大会であるが、年に一度村の守り神に村の安全を祈願する行事でもある。アーチェリーや村の安全を「歌で祈る」歌の宗教的機能ともいえるありがたが伺えた。

ツェザ村と同じく、ソナム・チョデンと夫のウゲン・ドルジも我々が聞くまでツァンモについては忘れていた。ソナム・チョデンが子どもの頃は、歌が止まった時の品物をとる、数人で品物を賭けるツァンモで遊んだ記憶しかなく、ツァンモで占いをしたり、自分で即座に歌詞を作ったりはしていなかった。ツェザ村のツァンモが一人前になった頃の男女の相性占いであったのに対し、ソナム・チョデンの村ではツァンモは単純に品物を取り合う子どもの遊びであった。ただし、祖父母や親世代が、ツァンモ・モタブニやツァンモ・ナムケ・チュニ、酔っぱらってツァンモ・ツェニをやっていたことは記憶しているという。自分たちは祖父母や親世代と同じようにはツァンモをしてこなかった。このように各世代、ツァンモの遊び方が代わり、ツァンモで遊ばなくなり、消えていった状況が把握できた。現在ソナム・チョデン世代の記憶の中に残るのみという状況である。

ヴェードラやツァンモだけでなく、ダガナに伝わる古い歌ダガナミラジュ、シャム・シャ・ドレイなどブータンの仏教や歴史、王家や国家形成だけでなく、ブータン人の生活や考え方をつくってきた文化の宝物のような歌がまさに消えつつある。それらの歌は、競争したり、品物を賭けたり、相性を占ったり、村の安全を祈ったり、宗教的教えを伝えたりする力をもった歌である。これらの民俗音楽文化についてブータンの人々の記憶にあるうちに調査を続けて行きたい。

### 【引用文献】

- 糸永正之（1986）「ブータンの「相聞歌」—交互唱による対面伝達行動の予備的研究—」『学習院大学東洋文化研究所研究報告』No.21, pp. 43-127.
- 伊野義博（2012）「ブータン歌謡ツァンモ—掛け合いと占いの諸相—」『民俗音楽研究』第37号, pp.1-12.
- 伊野義博, 黒田清子（2014a）「ブータンのツァンモ, 掛け合いと占いの諸相—ブナカにおける調査から—」『民俗音楽研究』第39号, pp. 37-48.
- 伊野義博, 尾見敦子, 黒田清子, 榎藤敦子, 山本幸正, Tshewang Tashi, Pema Wangchuk（2014b）「ブータン歌謡ツァンモの実際—トンサ県ツァンカ村とタンシジ村の場合—」『新潟大学教育学部研究紀要』第7巻第1号, pp. 81-99.
- 伊野義博, 黒田清子, 榎藤敦子, Pema Wangchuk（2015a）「ブータン歌謡カプシューの実際—タシガン・メラ村の場合—」『新潟大学教育学部研究紀要』第7巻第2号, pp.335-359.
- 伊野義博, 黒田清子, 榎藤敦子, ペマ・ウォンチュク（2015b）「ブータンの遊び歌 ツァンモとカプシュー—トンサとタシガンにおける調査から—」『民俗音楽研究』第40号, pp. 1-12.
- 伊野義博, 黒田清子, 加藤富美子, 榎藤敦子, 山本幸正, ツェワン・タシ, ペマ・ウォンチュク（2016a）「ブータンの遊び歌ツァンモ—学校教育における継承の取り組み—」『新潟大学教育学部研究紀要』第8巻第2号, pp. 167-192.
- 伊野義博, 黒田清子, 加藤富美子, 榎藤敦子, 山本幸正, ツェワン・タシ, ペマ・ウォンチュク（2017）「ブータンのあそび歌ツァンモ—学校教育における継承の取り組み その2—」『新潟大学教育学部研究紀要』第9巻第2号, pp.301-324.
- 高橋洋（2018）「ブータン自習室」<http://www.bazam.net/modules/xpress/?cat=6>, 2018年6月1日閲覧。
- 宮本万里（2011）「現代ブータンにおける聖俗の境界：チャムの担い手とその変遷」『アジアの無形文化における仮頭の研究—仮面との比較から—』立教大学アジア地域研究所, pp.57-66.
- Janet Herman and Kheng Sonam Dorji, Masters of Bhutanese Traditional Music Volume One, Music of Bhutan Research Center 2010.
- Jigme Wangchuk “The dying melodies of Bhutan” Across Bhutan Tours and Treks June21, 2012 available at: <http://acrossbhutan.blogspot.com/2012/06/dying-melodies-of-bhutan.html> (accessed June 1, 2018).
- Thinley Zangmo, “Boedra in the autumn of its days” KUENSELonline May 22, 2016 available at: <http://www.kuen->

selonline.com/boedra-in-the-autumn-of-its-days/ (accessed June 1, 2018).

Pema Namgay, "Sham Sha Doley-a dying Zhungdra" Feb 28, 2012 available at: <http://www.bbs.bt/news/?p=10020> (accessed June 1, 2018).